

ケニアの勃興する都市混合言語, シェン語

——仲間言葉から国民的アイデンティティ・マーカへ——

小 馬 徹

KOMMA Toru

(事業推進担当者)

はじめに

東アフリカのケニアでは、首都ナイロビ⁽¹⁾をはじめとする都市部を中心に新たな混合言語 (mixed language) であるシェン語 (Sheng language) が近年急速に普及し、社会的な影響力を俄かに高めている。本稿は、その社会階層的な変異の考察をもとに、元来都市的な年齢・社会階層のアイデンティティ・マーカとして生まれたシェン語が、今やケニア国民全体のアイデンティティ・マーカへと成長を遂げようとしていることを明らかにする⁽²⁾。

I シェン語研究の意味

シェン語は、東アフリカの混合共通語 (lingua franca) であるスワヒリ語をベースとして、英語やケニアで使用されているその他の言語からも諸々の要素を取り込みながら、ここ 30 年ほどの間に自生的に形成され、1990 年代半ばから急速に普及した新たな混合言語である。今も刻々変成しつつ発展し続けていて、ケニアの農村地域の交易センターや寄宿学校にも浸透しつつあるばかりか、さらには都市の若者層を中心に、タンザニアやウガンダなどスワヒリ語圏である近隣諸国にも影響を及ぼしつつある。

1 混合言語とシェン語

さて、早くはフーゴ・シューハルトが論じたように、混合言語を「できそこないの言語」と見なして顧みようとしないのは、著しく不当な研究態度である。そうした尊大な態度の淵源は、進化論の巨大な影響の下でヨーロッパの自文化中心主義が生み出した、19 世紀の印欧比較言語学 (歴史言語学) の「純粹言語」概念

にあった (田中 1981: 148-152)。

だが、その「純粹言語」概念こそが、歴史の現実を無視して 19 世紀のヨーロッパで選択された、一つのきわめて政治的な仮構だったのである。むしろ若々しい言語現象を見せる混合言語こそが、あらゆる言語が経験してきた生成過程の普遍的な容態を個々の歴史的な特殊性において表現しているのだ。その研究は、いわば言語の誕生と成長の過程を目の当たりにしてつぶさに観察できるという点で、かけがえのない長所もっている。この意味で、混合言語は、生きた言語、またその使い手である人間そのもの、さらには言語共同体や社会についての考察と理解にまたとない題材を提供してくれる、貴重な研究対象と考えられるようになった (田中 1981: 152-168)。

むろん、本稿が考察の対象とするシェン語もその例外ではない。それどころか、社会言語学 (あるいは言語人類学・言語社会学) の立場からは、シェン語は、単にそうした生きた混合言語の一つである以上の大きな意味をもつといえる。

2 国家の論理とストリートの論理

それは、言語を国民統合の最重要の要素の一つと見る近代国民国家 (国家の論理) と自前の言語を創発する庶民の生活上の切実な要求 (ストリートの論理) との間の対抗関係、ならびにスワヒリ語を公用語として造成するタンザニアと、国家語 (国民のコミュニケーション手段) に止めているケニアとの間の親和しつつ対抗する国家関係を読み解くうえで、シェン語が恰好の鍵を与えてくれるからである。

さらに、新たな二つの現代スワヒリ語ともいえる (タンザニア国家主導の) 「造成スワヒリ語」(Kiswa-

hili sanifu) と庶民のサバイバル・スワヒリ語とでも位置づけられるシェン語との間の屈折した複雑な対抗関係には、実に興味深い諸相がある。

タンザニア政府は、現代科学技術の目ざましい革新への対応に堪え得る十分な語彙と表現力を備えた現代語として「造成スワヒリ語」を人為的に練り上げる国家政策を、独立以来強力に推進し続けてきた。その結果、「造成スワヒリ語」は短期間に目ざましい発展を遂げて、今や東アフリカの共通言語としての権威を確立した。ケニアでも、また他の近隣諸国でも、スワヒリ語教育は、「造成スワヒリ語」を出来る限り忠実になぞる形で実施されてきたのである。

そればかりか、近年 AU (African Union, アフリカ連合)⁽³⁾ は英語、仏語、ポルトガル語、アラビア語に続く 5 番目の作業語として、スワヒリ語、すなわち「造成スワヒリ語」を採用した。しかも、ノーベル文学賞受賞者ウォレ・ショインカ (Wole Soyinka) を初めとして、アフリカの知識人や政治家の一部には、将来スワヒリ語をアフリカ全体の統一言語に採用すべきだという意見が存在している。スワヒリ語がバントゥ諸語の文法を土台に、アラビア語の語彙を大量に受け入れて東アフリカの海岸部で形成されたアフリカの言語であり、アフリカの西部・東部・南部に広く分布するバントゥ語圏はもとより、アフリカ人には学習が容易だというのが、その主たる理由である。

ところが、ヒップ・ホップ、レゲエ、ラップなどの音楽を核とする若者のサブカルチャーを梃子に、TV や新聞・雑誌などのマスメディアや CD などの電子媒体を通じて、シェン語が首都ダル・エス・サラームなどタンザニア諸都市の若者の間にも徐々に浸透し始めている。そのきっかけとなったのは、ケニアにおける複数政党制の復活などの政治の自由化や、構造調整プログラムの進展に伴う経済の自由化など、グローバリゼーションとも呼応する一連の自由化政策であった⁽⁴⁾。

そして、今やシェン語は、「造成スワヒリ語」の展開やタンザニアの言語政策そのものにさえも影響を与えつつあり、その覇権の予期せぬ脅威となり得る情勢が、タンザニアのスワヒリ語専門家たちにすら、今やはっきりと感じ取られるまでになった。

3 「非文字資料の体系化」と言語の問題

この問題は、本学 21 世紀 COE プログラムの統一テーマである「非文字資料の体系化」にとっても、実は、必ずしも他人ごとではない。というのは、文字をもたなかった、あるいは川田順造に従えば「文字を必要としない人々」(川田 2004: 172, *et al.*) の言語である話し言葉を体系化するとすれば、その文字化、なかでも正書法の設定という問題をどうしても避けて通れないからだ。

文字社会であっても、人々が言語活動を全面的に文字に依存してきたわけでもなければ、全ての人々が自在な文字使用能力をもち得たわけでもない——そのような社会は、これまでどこにも存在しなかったし、今も存在せず、将来現れるはずもない。(自らの日常を振り返ってみれば容易に想像がつく通り) 現代の知識人ですら、言語活動の大部分は話し言葉に頼っているのが実情である。C. レヴィ=ストロースの炯眼が鋭く見抜いた通り、文字はどこでも最初は人々を結び付けるコミュニケーションの手だてとしてではなく、むしろ人々を切り離して管理する技術と階層化の手段として登場したといえるのだ(レヴィ=ストロース 2001: 193-212)。

話言葉がまさしくそうであるように、「非文字資料」の大部分は、もとより「体系化」に馴染まない。それは、人々の不定形な生活のエネルギーの発露と横溢の所産であり、その痕跡の残存は、しばしばその意図せざる結果である。ことに庶民生活の領域では、その傾向が著しいだろう。

それを「体系化」することは、直接の目的が仮りに何であるにせよ、或る種の規格化や標準化を招き寄せてその生命力を削ぎ兼ねない一面をもってしまうのだ——たとえば、(物や情報を) 収集し展示するとは、対象を自らの視点から分断するとともに再構成して随意に意味付けることであり、それゆえに支配することでもあることを免れない。

本稿が目的とする、自生的なシェン語と国家プロジェクトによる「造成スワヒリ語」という、いわば「二つのスワヒリ語」が生きて対抗する姿の諸相についての考察は、こうした重大でありながらも失念されがちな問題を虚心坦懐に考えるうえでも、様々な示唆を与

えて、洞察を触発してくれるだろう。

本稿が最終的に示したいのは、最初はストリート・チルドレンや下層市民の言葉として蔑まれ、一時的な現象として程なく消滅するはずだと考えられてきたシェン語の、野太いまでに健康で旺盛な活力と、今日それが結果的に孕んでいるきわめて大きな社会的な意味である。

正書法をもたず、刻々姿を変えて止まない、浮雲のように不定形な話言葉であるシェン語。それが、今やケニアの数多い民族に所属し、また様々な出自をもつ若者世代を一つの横断的な社会階層として結びつけて、強く連帯させつつある。そしてその連帯感、植民地支配の結果今も持続している人工的な国家の枠組みの中で長年宿痾であった民族対立をたくまげして乗り越える、またとない手掛かりとさえなりつつあるのだ。

II 生成するシェン語

ここで、シェン語とは何かについて、形成の歴史過程や属性とその変異にもう少し立ち入って、解題しておく必要があるだろう。

1 発生の社会・言語環境

シェン語は、ケニアの独立(1963)以来農村部から急激に人々が流入して、著しく膨張した首都ナイロビの多文化・多言語状況の中で、1960年代の終わり(Moga & Fee 1995: preface)、ないしは1970年代の初め頃(Mbaabu & Ireri 2003 a:i)に生まれたとされる。

この言語の発生源をさらに特定すれば、それは都心の東側に広がるイーストランズ(Eastlands)のカロレニ地区(Kaloleni estate)だったと考えられている。カロレニ地区は、イーストランズ中「真のイーストランズ」(Real Eastlands)と呼ばれる一帯に含まれる。「真のイーストランズ」は、比較的所得の高い中級公務員などが住むやや上層の一帯でも、また貧窮に喘ぐスラム地帯でもない、庶民的な地区(estate)の総称である。

イーストランズには、事実上、ケニアのあらゆる民族の出身者が住んでいると見てよい。カロレニ地区には、西ナイル語系のルオ語話者(ルオ人)が、また

他の「真のイーストランズ」には、いずれもバントゥ語系の言語であるキクユ語、カンバ語、ルイヤ語の話者たち(キクユ人、カンバ人、ルイア人)が比較的多く住んでいる。

キクユ人はケニア最大の民族で、その伝統的な居住地はナイロビに接している。ルオ人は、西ケニアの広い地域に住むケニア第3の人口を誇る民族で、伝統的にキクユ人と共に国家政治を左右する一大勢力を形成してきた⁽⁵⁾。ことに、学術分野には質量ともに圧倒的な人材を送り出している。またルイア人はケニア西部に、カンバ人はケニア東部に住み、それぞれ、ケニア第2と第5の人口をもつ大民族である。そしてこれらの農耕民族は、早くからナイロビに出稼ぎに出た歴史をもっている。

シェン語発生の要因として、まず第一に、エステートと総称される庶民の居住地帯の、概して密集した貧しい住環境が挙げられる。簡便な作りの建物の一室に数多くの人々が同居していて、(逆説的に聞こえるかも知れないが)郊外や田舎でのようなプライバシーの確保はきわめて難しい。雑多な背景をもつ人々のこうした濃密な対面的接触関係の中で、まずビジジ的な内陸スワヒリ語(Up-country Swahili)が、主要な言語手段となった。ただし、農村からの人口の流入は止まらず、今でもスワヒリ語、諸固有語(民族語)、英語が入り交じって用いられていて、会話では二言語使用(diaglossia)やその重なり合いによる三言語使用(triglossia)も珍しくはない。

すなわち、ランダムな言語混用やコードの切り替え(code switching)は、ナイロビでは暮らしの常態なのである。それが、内陸スワヒリ語とは別の存在理由(後述)をもつ、新たな言語であるシェン語の創成に繋がったといえる。

シェン語は、当初はストリート・チルドレンの仲間言葉だったという根強い見方が、庶民の間にはある(Moga 1995 a; 1995 b)⁽⁶⁾。シェン語が1960年代の終わりから1970年代の初め頃に生まれたとされる。事実は、それに従えばイーストランズ生まれの最初の子供たちの言語獲得期とシェン語の草創期がよく符合することになって、確かにこの見方に有力な裏付けを与えているといえよう。先に触れた多言語状況(multiglossia)

の中で、子供たち、ことに逸脱的な者たちが、大人や同世代の子供たちから秘密を守ろうとして仲間内の符牒を創り出すのは、蓋し自然ななりゆきだっただろう。

2 対抗する二つのシェン語

シェン語は、スワヒリ語の文法をほぼ忠実に踏襲しているが、語順や造語法など、一部では英語の文法もかなりの程度援用している。語彙は、スワヒリ語と英語からの大量の借用語が中心となっている。他に、(アフリカの言語であるかどうかを問わず) 現在ケニアで用いられている多くの言語からも語彙を借用しており、特にイーストランズの主要な住人の母語であるルオ語、キクユ語、カンバ語、ルイア語からの借用例と影響が目立つ。

シェン語は、まだ形成中の言語であり、内的な変異の幅と流動性の大きさを著しい特徴とする。ただし、実はシェン語には、地域方言でも社会方言でもあるといえる、もう一つの重要なバージョンがある。

それは、一般にはエンシュ語 (Engsh) (Abdulaziz & Osinde 1997:46-62)、一部ではイングリッシュ語 (English) (Mbaabu & Ireri 2003 a: ii-iii, *et al.*) と呼ばれるものであるが、本稿では大勢に従ってエンシュ語としておきたい。

エンシュ語は、英語の文法を根幹に据えつつスワヒリ語の文法も援用する点で、シェン語の鏡像的な言語であるといえるだろうか。ともかくも、こうしてシェン語から一応の差異化が図られているのだ。このバージョンが話されるのは、主にナイロビ都心部を挟んでイーストランズの反対側に広がる、ウエストランズ (Westlands) と呼ばれる一帯である。

この一帯は、元々(ケニアの独立以前)は白人入植者用の住宅地帯であったが——使用人以外のアフリカ人はナイロビに住めなかった——現在では、アフリカ人エリートたちの広大な邸宅が展開している。また一角には、現代的で高級なショッピング・モール、レストラン、私立学校、病院、スポーツクラブなどが立ち並んでいる。住民には白人や(主にインド系)アジア人も混じり、ケニア人住民の民族構成には(イーストランズの場合とは違って)特に偏りが無い。

住民たちは生活の万端に自家用車を頻用し、意思疎通は主に英語で行われているが、住民同士の対面的な相互接触は稀である。ただし、邸宅内の付設宿舎に住むか近隣地区(のシェン語地帯)から通ってくる(家政婦、庭師、運転手、夜警などの)使用人たちの間の会話は、出身民族が同じなら通常その固有語(民族語)で、異なっていればスワヒリ語かシェン語で行われている。子供たちは、(両親が同民族出身の場合でも、彼らの母語ではなく)大概最初から英語のみで育てられる。一方、民族語や(小学校に入学してから学ぶ)スワヒリ語は、最初は興味本位に使用人との会話で覚える程度である。

エンシュ語は、シェン語の形成に触発されて、しかもシェン語への強い対抗意識から形成されたバージョンだと考えられる。その背景にあるのは、ウエストランズ住民に特有のエリート意識と、最新の流行を追い求める若者たちの「見せびらかし」文化である。彼らがいかに得意気に乗り回す高級車や、出入りする高級なレストランや酒場などに纏わる語彙の多さが、エンシュ語の特徴として際立っている。ナイロビのエリートたちは、初対面の相手にどの地区(estate)に住んでいるのかと尋ねるのが常だが、これは彼らの強烈なエリート意識のなせる業なのだ。

つまりエンシュ語は、シェン語の話者を蔑んで自他を差異化する、階層的な自己同定の標識(identity marker)としての機能を強く担っているのである。それゆえ、エンシュ語もまた、スワヒリ語と英語の構成比重を逆転した、シェン語の社会階層的な一変異と解するのがむしろ妥当であろう。実際、話者のスワヒリ語と英語への傾斜の度合いは相対的で、且つ遷移的⁽⁷⁾であって、構造上の論理に本質的な違いはない。

ところで、シェン語(Sheng)という名称には、英語という名称から eng, スワヒリ語([Ki-] Swahili)という名称から s と h を得たとする説(Mbaabu & Ireri 2003 a: i)がある。だが、その裏付けは示されていない。

シェン語は——それは、他の類似の言語でもやはり一つの定法となっているのだが——借用語への音の加除や逆転、あるいは音位転移(metathesis)によって、語のシェン語化を図っている。シェン(Sheng)とい

う単語は、この仕方にも則って、English から li の音を省いて、前半部と後半部を入れ換えた造語であると思われる。そこには、スワヒリ語でも英語でもない、自分たちの新言語という含意があるだろう。一方（イングリッシュとも呼ばれる）エンシュ語（Engsh）は、シェン語への対抗意識から、Sheng の語を構成する音の前半部と後半部をあえて再度入れ換えて、元々の English に近づけた名称だと考えられるのである。

実際、こうした複雑で手のこんだ心理の綾や言語効果を自在に表出できる点にこそ、「学校のスワヒリ語」である「造成スワヒリ語」では完全に抑圧されてしまっている、シェン語の自由で伸びやかな生命力の神髄がある。シェン語は、何よりもまず若者たちの自前の言葉なのだ。両言語の名称は、あいまって、シェン語の活力をよく象徴しているといえるだろう。

III 都市階層の同一性の標識

シェン語を社会的に考察する場合の要点の一つは、それがピジン語（pidgin）でも、またクレオール語（creole）でもないということだ。ピジンとは、二つ以上の互いに大きく隔絶した言語の話者が出会った時に、言語コミュニケーションを成り立たせようと双方が止むを得ず歩み寄って創られる混合語一般を指す。一方クレオールは、それを母語とする話者を獲得した段階に至ったピジンの新たなあり方を指す術語である。

だが、ケニア独立直後のナイロビは、そうした切迫した言語状況にはなかった。公用語（国家の三権を実施するための言語）としての英語と国家語（国民の意思疎通の手段）としてのスワヒリ語、つまり標準スワヒリ語（standard Swahili）が、共に広く教育の言語として採用されていた。また庶民にも、既に内陸スワヒリ語（Up-country Swahili）またはナイロビ・スワヒリ語と呼ばれる、ピジン・スワヒリ語が既にあった。ナイロビ住民は、それら三つの言語を必要に応じて選択して、通常のコミュニケーションを十分に達していたのである。

また、イーストランドズを中心にシェン語の第一言語化が進んでいる現在でも、今のところ、まだシェン語を母語とする子供たちは確認されていない⁽⁸⁾。

シェン語は、やはり先に見たように、特定の社会階

層に属する小集団の「自己同一性の標識」（identity marker）という機能に、その形成の契機を求めるべきであろう。公用語（英語）や国家語（スワヒリ語）に対して、42 の公認土着語（vernacular）は、民族集団の文化と同一性を保証する言語として憲法に位置づけられている。一方シェン語は、各土地の風土に根ざした民族集団ではなく、首都ナイロビ（や他の大都市）の社会階層、ことに若者世代の同一性を確保する必要に迫られて、自生的に形成をみた言語と見るのが最も相応しい。本稿の論点の一つも、まさしくそこにある。

そこで、階層的なアイデンティティ・マーカたるシェン語が、その各々の階層のどのような希求に応じているのか、もう少し子細に見ていこう。

1 職業階層のアイデンティティ・マーカ

少し先にエンシュ語を、シェン語に反発を感じていたエリート層が専ら居住する、ウエストランズの若者たちのアイデンティティ・マーカとして捉え、シェン語に対抗しようとする、シェン語の社会方言と見るべきだと論じた。その時に既に本節のテーマに言及していることになるのは、言を待たない。

これと合わせて重要なのは、狭義のシェン語が、まさしくエリート層の対極に位置する職業階層において、アイデンティティ・マーカともなっていることである。その一つの典型的な例が、乗合自動車（matatu）乗組員やその関係者の場合である。

ケニア国内ではまだ鉄道路線や航空路線は未発達である。道路網も貧弱で舗装率も低く、また管理状態も決して良くない。それでも運輸・交通のほとんどを、マタトゥ（matatu）と呼ばれる小型の乗合自動車（多くは日本製のミニバス）と大型バスが担っている。そして、都市部の無学歴・低学歴層の若者たちを最も大量に雇用・吸収している産業部門が、ごく小さな資本で運営できる、このマタトゥ産業なのである。

低料金で乗れて、数多い路線をもつマタトゥは、今や庶民の足としてなくてはならない存在である。ことに、大都会ナイロビの庶民にとってはまさしくそうである。全ての路線が不定時運行で、（ターミナルで）客を一杯にしてから動き出すマタトゥは、運転手と車

掌の他に、客引きや（即時出発を意味する）満員を装うためのサクラ（員数）を務める若者たちをも必要としている。これらの若者は、いわばおしかけで運転手や車掌を手伝い、何がしかの見返りをせびりとして糊口をしのいでいる。彼らは宵越しの銭をもたない、派手で見栄っ張りで無鉄砲な、若い消費者でもある。だが、やがて（見よう見まねで）運転を覚えたら、運転手や車掌に取り立てて貰えるかも知れない。彼らは「数」（複数）、または員数を意味するマナンバ（*manamba*）の語で呼ばれるが、これもスワヒリ語起源のシェン単語である。シェン語の別の表現では、英語で客引きを意味する *tout* にマタトゥを冠して *matatu tout* ともいう。

彼らマナンバや運転手や車掌の多くは、英語もスワヒリ語も満足に解せず、口語であるシェン語が彼らの第一言語（*first language*）になっている。だが、マタトゥ産業の従事者たちは、必要に応じて幾つもの新語を次々にあみだして、シェン語の形成発展に独特の仕方でも寄与し続けてきた。それは、あるジャンルの隠語（*argot*）を創り出し、その語彙を次々と取り替えるという仕方である。

マナンバに最も近い語感をもつ日本語の単語は、（やや古めかしいが）雲助だろう。各路線の始点と終点以外には定まった停留所がなく、到る所で適当に客を拾い、何処でも適当に降ろす以上、料金体系は大雑把なもので、いわば客との駆け引きで決まることになる。また、過剰に客を詰め込んだり、猛烈なスピードでぶっ飛ばして競走するなどの乱暴な営業形態は、交通警察官の目の仇になると共に、彼らが不法に賄賂を強要する口実ともなってきた⁽⁹⁾。

だから、運転手・車掌・マナンバは、客や警察官にはわからない、金額（またはその額の硬貨・紙幣）を指す独特の符牒を常に用意している。まず、それらの幾つかを挙げてみよう。貨幣：*chapaa, mnago, nyandu*, 一シリング：*chuma*, 五シリング：*king'ori, kobore, Musebeni*, 十シリング：*ashara*, 五十シリング：*finje*, 百シリング：*soo*, 二百シリング：*album*, 五百シリング：*Jirongo*, 千シリング：*ng'iri*。

これらには、語源がわからないものもあれば、誰もが風刺やウイットを感じて思わず頬を緩める命名もあ

る。例えば、五シリングをムセベニ（*Musebeni*）と呼ぶのは、ウガンダの現職大統領ムセベニ（*Yoweri Museveni*）の頭のとっぺんが将棋の駒のようにとんがっているのと、（現在の前の型の）五シリング硬貨が肉厚の大振りな七角形の形状であることを対比しているのだ。五百シリングがジロンゴ（*Jirongo*）と呼ばれるのは、同名の政治家（*Cyrus Jirongo*、当時はモイ大統領の選挙参謀）が1992年の総選挙戦で五百シリング札をばら撒いて「令名」を馳せたからであった。

差し迫った危険を警告するために、マナンバが彼らの「敵」である警官を呼ぶ語は二十に余る。その一部を示せば、*ako, flik, itina, kachero, kahio (Kahiu), karai, karao (karau), mabai, mahindra, pai, ponyi, sonyi, wahia*, などとなる。仲間のマナンバは *makanga*, 車掌は *conde*（<Eng. conductor）などと呼ぶ。造語が新しい内は、警官や客を出し抜くことができるが、一旦彼らの知る所となると、FM ラジオのディスクジョッキーやアナウンサーが使い始め、やがて主流シェン語の語彙に練り入れられる。するとマナンバたちは、またいつの間にか新たな符牒となる語を創りだして対抗するのである。

ストリート・チルドレンの最も真っ当な生活の道は、食い残しの食べ物をゴミ箱から拾って食料を確保する一方、ゴミの山から紙屑を回収してきて問屋に売ることだ。しかし、経済の自由化以来、南アフリカからトレット・ロールなど安い再生紙製品が大量に輸入されて、ケニアの同業者は振るわず、ストリート・チルドレンの「生業」は一層苦しくなった。そこで、通行人へのたかりや盗みも、生きていくためには厭わない。彼らが使うシェン語の特徴は、何よりも、「盗む」の同意語が十を超えることである。その一つは、スワヒリ語で「集める」を意味する *sanya* を転用した *sanya* であるが、ここにもシェン語の特徴が顔を覗かせている。

また、食べることや食べ物を意味する言葉も多い。例えば、肉：*nyaki, nyame, naymham*, ポテトチップス：*chibas, chipo*, 「旨い」：*yamii!*、これらの語彙は、普通の子供のシェン語の語彙とも部分的に重なりあっている。また、パン半斤：*nutha*（<Sw. *nusu*）

半分), パン四分の一斤: *kwotidhe* (<Eng. quarter) などは庶民地区 (estate) の生活の厳しさを物語る大人のシェン語だが, ストリート・チルドレンのシェン語の語彙には既にこれらが加わっている。

2 年齢階層のアイデンティティ・マーカ

上のように, シェン語は特定の社会階層に属する小集団のアイデンティティ・マーカである以上に, むしろ特定の年齢階層 (あるいは世代階層) に属する小集団のアイデンティティ・マーカとなっているといえる側面がある。小学生, 中学生, 専門学校生, 大学生には, それぞれの年代層に特有の, しかもそれぞれの学校で, 個々に独自の特徴をもつシェン語が話されている。

都会では小学生が既にシェン語を話し始めるが, 田舎では田舎町の寄宿制中学校に入学すると同時にシェン語の洗礼を受けるのが通例である。しかも, それは都会から来ている同級生や上級生による, シェン語の無知に対する侮蔑から来るイジメという形での洗礼であり, 新入生 (シェン語では *mono*) は大きなカルチュア・ショックを受けるのが普通である。

中学校段階で一般的に使われるシェン語の単語については, 次のような例を挙げることができる。先生: *tije* (<Eng. teacher), 牛乳: *milo* (<Eng. milk), 教室: *daro* (<Sw. *darasa*), 停学: *saspi* (<Eng. suspension), 半期: *hafta* (<Eng. half term), 規則に違反して捕まる: *bampwa*。

もう一つの語群は, 他の中学校の名称を独特の仕方に変形したものである。例えば, Alliance Boy's High School: *Bush Boys*, The Kenya Girl's High School: *Bomas*, Pangani Girl's High School: *Pango*, という調子で命名している。

これらの例に共通するのは, 長たらしい語を舌に乗りやすい簡略な表現で置き換えていること, またアフリカ人である自分たちが発音し易い音形に改め, 表記も発音に忠実なものにしていることである。一例を挙げれば「半期」を表す *hafta* は英語の *half* と *term* を繋ぎ併せた造語で, 二つ (以上複数) の単語を連結してその一部を省いて作られる混成語 (fusion, amalgam), あるいは「かばん語」と呼ばれる典型的

な形をとっている。その意味で, シェン語の造語法は決して独創的ではなく, むしろ一般的でさえある。だが, これこそが, シェン語の基本的な特徴であり, 庶民的な生命力の源泉であるといえる。

大学に入学すると, 生活環境が複雑になり, 当然それに対応する次のようなシェン語の単語が加わる。学生会館: *styudi* (<Eng. student centre), 図書館: *liabu, lib* (<Eng. library), 管理部門: *adimin* (<Eng. administration centre), 購買部: *shoppi* (<Eng. shopping centre), 学期手当: *boom* (<Eng. boom)。ただし, これらの例でも, 造語法の基本は先に挙げた諸例と異ならない。

大学生のシェン語の大きな特徴は, スワヒリ語や民族語 (固有語) を積極的に取り入れていることである。例えば, 「誘惑する」を意味する *kukatia* は, スワヒリ語の不定詞化接辞 “*ku-*” と, 同じくスワヒリ語で「切る」を表す動詞 “*kata*” の前置詞形 “*katia*” (～のために [に向かって, を用いて……] 切る) を結合した造語である。また, 「(異性を) ハントする」を意味する “*kuhanya*” は, キクユ語で同じ意味を表す語に似た音を借りて, それに “*ku-*” を付けたものである。こうした例は数多く, 枚挙に暇がない。

無論, 学術的な気分を映す造語例も見られる。例えば, インド人が伝えて一般化したチャパティ (種なしの平たいパン) を *dialogue* (<Eng.) と言ったり, 警官隊と実力で渡り合う時に投げる石を *air-to-air missile* と呼ぶのが, それである。しかし, ウエストランズの若者たちのバージョン (エンシュ語) が作為的に英語との類似性を強調するのに対して, 通例, 大学生のバージョンはもっと屈託がない。真のエリートとしての矜持があり, 一般に, 独創性のかげらもない「猿まね」だとして, むしろエンシュ語バージョンを軽蔑する傾きが強い。

このような大学生バージョンに絶大な影響を及ぼしているのが, ケニアのヒップ・ホップ音楽である。ヒップ・ホップのスターたちの大部分は, 元ストリート・チルドレンであり, 彼らの曲の歌詞から, 次々と新しいシェン語の単語が生まれ, あっという間に学生バージョンに受け入れられて定着していく。

そうした例を幾つか挙げておこう。 *kujizi* (恋に落

ちる)はNamelessの“Juju”から、*mossmoss*(ゆっくり)はAnn Wakeshoの同じタイトルの歌から、*juala*(コンドーム)はポリエチレンを意味するルオ語をCircute & Jo-elが同名の曲でコンドームの意味で用いたことから、*watoi*(子供[<Sw. *Watoto* (sg. *mtoto*), 子供])も同じ曲から一般化した語である。こうした事からも分かるように、今や大学生バージョンは若者一般のシェン語と盛んに交流して交じり合い、両者の境目は判然としないというべきであろう。

若者たち、ことに大学生たちがシェン語を彼らの第一言語として受けとめている理由として口々に訴えるのは、親の世代が彼らの「コスモポリタン」なライフスタイルにいかにも無理解だということだ。「親の世代に対する絶望がシェン語に向かわせるのだ」と、幾人もの大学生が語った。彼らのシェン語には、親たちに知られたくない自分たちの秘密を守るための隠語という要素が確かに強く見られる。

例えば、「女の子」を意味する語は、*banana, chikii, kago, kipusa, kirenge, malaika, mayanga, mkuki*など、30を超える。また、「密造酒」を指す語も、African dry gin, *chang'aa, machozi ya simba*, Nubian gin, spirit, *vepa*など20を超えるだろう。「色恋沙汰」, 「大麻」, 「売春婦」, 「警官」を意味する語や、性的な含みをもつ語もやはり数多い。さらに、嘲笑を含んだ「田舎者」を内包とする語が幾つもある。お上りさんを現代都会生活の邪魔者とみなし、親の世代と同様に彼らも排除する心の趣があからさまに表現されているのだ。

つまり、シェン語からは若者世代の硬直的で不寛容な気分が色濃く漂ってくる。彼らはシェン語こそが最も自分の心をうまく伝えあえる言葉、つまり「第一言語」(first language)だという。要するに、英語でもスワヒリ語でもなくシェン語を使うことによって、大人たちとは異なる社会集団(階層)としての同一世代に属しているのだという連帯意識を確認しているのだ。この意味で、シェン語は若者のアイデンティティ・マーカとして何よりもよく機能しているのである。

IV 国民的アイデンティティ・マーカへ

しかし、シェン語は既に若者のアイデンティティ・

マーカの域を超えつつある。次にみるように、ある意味で、ケニアの市民にケニア国民としての自覚を与える、国民的なアイデンティティ・マーカにさえなる可能性を予感させるのである。

1 混合言語の美しさと力強さ

表現力の豊かさと自在さのゆえに、日常耳にし、あるいは目にするシェン語に美しささえ感じることがある。

例えば、或る新聞記事で見つけた、“*Hizo motii (morenga) huenda kama zinafly. Nahuendeshwa na miguys bodii bodii.*”などがそうである。全体の意味は、「これらの(*Hizo*)自動車(*motii* または *morenga*)は、飛ぶように(*kama zinafly*)いつも走っている(*huenda*)。しかも(*na*), すっげー^{がたい}身体の奴ら(*miguys bodii bodii*)に(*na*) 転がされて(*hauendeshwa*)」とでもなろう。*miguys bodii bodii*のリズム感とスピード感などは、どうだろう。well-built peopleとかtough guysなどの英語では、遠く及ぶまい。(母語である)海岸スワヒリ語の典雅な表現なら、*watu wameojenga wakajengekwa*とでもなるのだろうが、こんな複雑でモッタリしたスワヒリ語は端から埒外だろう。

英単語のguy (guys)に、人の複数を示すスワヒリ語の第2クラス接頭辞 *wa-*ではなく、その代りに長い物の複数を示す第4クラス接頭辞 *mi-*を付けて(*miguys*として)やや突き放すという語感が堪らない。例えば、正式のスワヒリ語なら子供(*mtoto*)の複数形は*watoto*となる。ところが、(母語である)海岸スワヒリ語の俗語には、*mitoto*という表現もある。この変則的な語形で「餓鬼ども」という語感をうまく出しているのだ。また、*bodii bodii* (<Eng. body)のいかにも直接的な写実力もかえって説得的である。

シェン語には、「造成スワヒリ語」教育への造乱という側面もある。「造成スワヒリ語」は、いわば箸のあげ下ろしに至るまで、完全にタンザニアの国家政策によって決定され、支配されている。元々、母語としてのスワヒリ語はタンザニアだけではなく東アフリカ海岸部に広く分布している。ところが、近年の「造成

スワヒリ語」形成の過程を通じて、タンザニアの権威はこの言葉とその教育の隅々にまで浸透してしまった。ケニア国民だけでなく、ケニア政府にも何一つ発言権はなく、タンザニアが創りだした新しい表現を一語一句鵜呑みにして、細心の注意を払って模倣しなければならない。もはや、(母語としてのスワヒリ語以外の)スワヒリ語は、遠くケニア人の手の届かない所に奪い去られてしまったのだ。

一方、シェン語は自らの掌中にあり、自由自在に創造の才を発揮できる融通無碍な言語である。今や、大人世代にもシェン語に親和的な態度を示す者は少なくない。教師は、シェン語を交えて若者の良き理解者であることをアピールして、人気を買う。新聞各紙は、競って週に幾度もマガジーンを付けているが、その人気コラム、ユーモア欄、漫画にはシェン語が溢れていて、絶大な人気を誇っている。1990年代半ばから簇生したFMラジオ曲のディスクジョッキーは、英語とスワヒリ語の他にシェン語が使えないと、今や仕事にならないほどだ。

2 シェン語と政治

政治家も、シェン語に熱い視線を送っている。2002年の総選挙の折りに、野党NARC(虹の連立国民連盟)から国会議員に立候補したカロンゾ(Stephen Kalonzo Musyoka)⁽¹⁰⁾は、自分の名前に“Tosha!”を続けて“Kalonzo Tosha!”と声を張り上げ、この句をキャンペーンのキャッチフレーズにして成功した。toshaは元々スワヒリ語で「十分な」を意味する。だがシェン語では、「最高」とか、「言うことなし」を意味している。“Radio Citizen Tosha!”と、FM曲の宣伝文句にも使われていた。

また、シェン語が英語教育やスワヒリ語教育への悪影響を及ぼしていると言い募る政治家、役人、学者が多いなかで、当時副大統領であった故ワマルワ・キジヤナ⁽¹¹⁾は、2003年の国会で、ケニア人の肌にあった言葉であるシェン語を将来国会での論述に使うべきであると演説した。この発言は、多くの知識人には衝撃的なものとして受けとめられ、賛否両論があった。ただ、今日のケニアで最も有力な政治家の一人であるライラ・オディンガ⁽¹²⁾は、はっきりと賛意を示した。

実は、彼らが属していたNARC(虹の連立国民連盟)は、2002年の総選挙で、“unbwogable”をキャッチフレーズに用いて支持を集めた。この言葉の語幹はルオ語で「打ち破る」を意味する“bwogo”で、その前後に英語の接辞“un-”と“-able”が付けられている。全体としては、英語のinvisibleにあたるだろうか。

無論、“unbwogable”は彼らが独創したものではない。この表現は、やはりヒップ・ホップ音楽の人気ラップ・デュオであるGidiGidi & MajiMajiが作った曲のタイトルだったのである。NARCは、この曲を公式のキャンペーン・ソングに用いた。その候補者たちは、演説の最後にこの曲のコーラス部分である、“Who can bwogo me?”を歌って聴衆(ことに若者たち)の心を掴もうとした。そして、狙い通りに成功を収めたのである。

おわりに

以上、誠に雑駁な論述に終始することになってしまった。それでも、「はじめに」に掲げておいた目標は、それなりに達成できたように思う。

独立後のタンザニアは、国家スワヒリ語会議(National Kiswahili Council; BAKITA)とスワヒリ語研究所(Institute of Kiswahili Research: TUKI)という強力な推進機関を創設して、現代語としての「造成スワヒリ語」(Kiswahili sanifu)を作り上げてきた。タンザニアが、スワヒリ語を公用語として、確かな国民統合をなし遂げたことは、アフリカの国民国家の例外的な成功例として、よく知られている。

他方、ケニアの庶民の間から育ってきた野放図な混合言語であり、「もう一つのスワヒリ語」とも呼べるシェン語は、まだほとんど世に知られていない。だが、言語学の研究対象として、この言葉には以上に見たように大きな魅力がある。そして、言語人類学、ないしは社会言語学の立場からは、それを遥かにしのぐ研究意義を見出すことができる。このささやかな拙稿が、せめてその一端を伝えられたとすれば幸いである。

注

(1) 1999年現在、人口2,143,254 (Republic of Kenya 2001)。

- (2) 文献資料も可能な限り参照したが、主として用いたのは、1979年以來20次に渡って実施した、人類学的な現地参与調査の資料である。また、煩瑣になることを避けて一々引用していないのだが、この期間にケニアの主要紙に掲載された数多くの記事も、併せて参考にした。
- (3) OAU (アフリカ統一機構) の発展・後継機関で、アフリカの53の国家で構成されている。
- (4) 中でも重要なのは、1990年代半ばの電波の、ことにFM波の自由化であった。この辺りの事情は、稿を改めて論じる予定である。
- (5) 1989年に実施された国勢調査の集計 (の tribes の項) によると、これらの民族集団の人口は、次のようになる。キクユ人：4,455,865, ルイア人：3,083,273, ルオ人：2,653,932, カムバ人：2,448,302 (Republic of Kenya 1994)。なお、1999年に実施された直近の国勢調査の集計 (Republic of Kenya 2001) からは、tribes の項が削除されていて、民族ごとの人口を知ることはできない。
- (6) 興味深いのは、シェン誌 (*Sheng*) というタイトルをもつパンフレット大の小雑誌がかつて2号まで出ていて、そこには2回で完結する「チョコラ」 (“*Chokora*”) と題する小説 (Moga 1995 a, 1995 b) が載せられたことである。チョコラとは「紙屑拾いをして露命を繋ぐ者」、つまりストリート・チルドレンを意味するシェン語の単語である。その作者名は、どこにも明記されていないが、掌中サイズのごく小さな *Sheng Dictionary* を出し続けている Ginseng Publishers 社主、ジャコ・モガの手になる作品である——直接本人に会って確かめた。モガは、シェン語の起源がストリート・チルドレンの仲間言葉であると信じていて、彼らの悲惨な人生を小説にしてシェン誌に掲載したのである。
- ところで、混合言語でありながら、Ginseng Publishers によるパンフレット型の出版物や、ささやかなものではあっても2種類の辞書 (Moga & Fee 1993, King’ei & Musau 2002) をもっている点が、シェン語の著しい特徴である。この点についても、稿を改めて論じたい。
- (7) この点で、次の事実が興味深い。寄宿制中学校 (secondary school) に入学してシェン語に直に接したばかりの一年生 (*mono*) たちのシェン語は、英語の文法と語彙にきわめて強く依存していて、エンシェ語によく似ている。習熟するとともに彼らのシェン語は、スワヒリ語的な構文やニュアンスを強めていく。
- (8) ただし、きちんとした調査が行われてこなかったことを指摘しなければならない。この点は、今後のシェン語研究で強く注目されるであろう。
- (9) ただし、2002年末の総選挙で当時の与党KANU (ケニア・アフリカ人国民連合) が破れて政権をNARC (虹の連立国民連盟) に譲った後、2003年からマタトゥ産業の統制が一気に強められ、速度調整機と座席ベルトの装着、けばけばしい絵を描いた車体外装の禁止と単色化、公共交

通機関を示すオレンジ色の一本の横線描出、大音響の室内音楽の禁止などが義務付けられた。

- (10) 彼はNARC政権 (キバキ政権) で環境大臣を務めている。なお、その副大臣が2004年度のノーベル平和賞を受賞したマータイ (Prof. Wangari Maathai) である。二人は、森林地域に通って耕作しつつ植林する「シャンバ・システム」 (*shamba system*) の温存の可否をめぐる、2004年夏以降鋭く対立した——カロンゾが宥和派——が、マータイの受賞がこの件に重大な影響を与えた。
- (11) 俗称。ルイア人 (より正確にはその中のブクス人) の政治家で、自由民主党 (LDP) 所属。正式の名前は Michael Christopher Kijana Wamalwa。2003年8月に死去。
- (12) Raila Omollo Odinga。ルオ人の中で絶大な支持を得ている、ルオ人の政治家。NARC政権実現の立役者といわれている。

参考文献

- Abudlaziz, M. H. and Ken Osinde
1997 “Sheng and English: Development of Mixed Codes among the Urban Youth in Kenya” *International Journal of Sociology of Language* 125: 43-63.
- Amidu, Assibi Apatewon
1995 a “Kiswahili: People, Language, Literature and Lingua Franca” *Nordic Journal of African Studies* 4 (1): 104-125.
1995 b “Kiswahili, a Continental Language: How Possible Is It? (Part I)” *Nordic Journal of African Studies* 4 (2): 50-72.
1996 “Kiswahili, a Continental Language: How Possible Is It? (Part II)” *Nordic Journal of African Studies* 5 (1): 84-106.
- King’ei, Geoffrey K. & Paul M. Musau
2002 *Utata wa Kiswahili Sanifu (toleo la kwanza)*, Nairobi: Didaxis.
2003 a “Sheng—Its Major Characteristics and Impact on Standard Kiswahili and English”—Introduction to the *Sheng-English Dictionary (vide infra)*.
- Mbaabu, Ireri and Kipande Nzunga
2003 b *Sheng-English Dictionary: Deciphering East Africa’s Underworld Language*, Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.
- Moga, Jacko
1994 “Sheng Language”, *Radar*, 1: 3-17.
1995 a “Chokora”, *Sheng*, 1: 4-6, 10-11, 13-14, 17-20.
1995 b “Chokora”, *Sheng*, 2: 4-6, 10-12, 14, 21, 23.
1995 c “Sheng”, *Radar*, 2: 11-16, 21-23.
- Moga, Jacko & Dan Fee (eds.)
1995 (1993) *Sheng Dictionary*, 2nd ed., Nairobi: Ginseng Publishers.

- 2000 *Sheng Dictionary*, 4th ed. (Magazine ed.), Nairobi : Ginseng Publishers.
- 2004 *Sheng Dictionary*, 5th ed., Nairobi : Ginseng Publishers.
- Mwansoko, H. J. M.
2003 “Swahili in Academic Writing” *Nordic Journal of African Studies* 12 (3) : 265-276.
- Ngithi, M. E.
2002 “The Influence of Sheng among the Kenyan Youth on Standard English” (submitted in partial fulfillment of the requirement for the degree of bachelor of arts), Department of Linguistics and African Languages, University of Nairobi. (unpublished)
- Ogech, Nathan Oyori
2003 “On Language Rights in Kenya” *Nordic Journal of African Studies* 12 (3) : 277-295.
- Republic of Kenya
1994 *Kenya Population Census 1989*, vol. 1.
2001 *1999 Population and Housing Census*, vol. 1.
- Roy-Campbell, Z. M.
1995 “Does Medium of Instruction Really Matter ?—The Language Question in Africa : Tanzanian Experience” *Utafiti (New Series)* 2 (1 & 2) : 22-39.
- Tasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili
2001 *Kamusi ya Kiswahili-Kingereza (toleo la kwanza)*, Dar es Salaam : Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.
- 川田順造
2004 『コトバ, 言葉, ことば——文字と日本語を考える』, 東京 : 青土社.
- 小馬徹
2004 「ma が差した話——スワヒリ語のレッスン」, 『言語』 33 (8) : 4-5.
- レヴィ = ストロース, C.
2001 『悲しき熱帯 II』 川田順造訳, 東京 : 中央公論新社.
- 田中克彦
1978 『言語からみた民族と国家』, 東京 : 岩波書店.
1981 『ことばと国家』, 東京 : 岩波書店.